《序文》
“いざ、大いなることを歌おう。
たしかに信仰の神秘は偉大です。
神は肉体としてこの世に現われ、聖霊によって義とされ、天使たちに見守られ、諸国民の間で宣べ伝えられ、世界中で信じられ、
そして栄光のうちに天上へと召されました。
この神の中に、
知恵と知識の財宝が秘められています。”

この序文は《メサイア》の作詞者チャールズ・ジェネンズが、ダブリンでのメサイア初演に際し、ヘンデルに送った聖句です。この言葉の中に、彼が《メサイア》で真摯に語ろうとしたことが集約されていると言われています。

新約聖書（以下新約と略）に「これらのことが起こったのは、主が預言者によって言われたことの成就されるためである」と記されているように、すでに旧約聖書（以下旧約と略）では、紀元前何百年も前から、来るべき最後の審判とともに、救世主イエスの誕生・受難・迫害・その後の復活などについて預言されていました。

※ちなみに、「メサイア」という言葉は、本来はヘブライ語で「油を注がれた者」（＝神に祝福された者）を意味し、ユダヤ教、キリスト教における「救世主」を指す言葉を英語読みにしたものです。それは神聖な名であり、教会ではなく劇場で歌われるオラトリオのタイトルとして使用することには、当時どれほどの勇気がいったことでしょうか。

ジェネンズは、聖書への深い理解をもとに旧約・新約双方から聖句を選び取り、《メサイア》の歌詞を編纂しました。キリスト教圏の方にはおなじみの説話とお馴染みの聖句で構成された壮大な物語です。ここでは、引用された聖句の背景や、それらの聖句を彩るヘンデルの音楽の魅力にも少し触れながら、物語のあらすじを追っていきたいと思います。

《メサイア》あらすじ

第１部『救世主到来の予言・降誕』

【序曲】

なぜ、悲哀にみちた序曲から始まるのか…
アダムとイブから始まり、聖書には、人間の営みの歴史における愚かさの繰り返しが、あまりにも多く記されています。一度読んだだけではとても分かりにくいのですが、繰り返し読んでいるうちに理解できてくるでしょう。聖書に書かれた人々の姿は、実は私たち人間の姿だと。ここをふまえて曲をたどっていくと、《メサイア》の曲にともなう様々な感情も、生き生きと感じ取ることができるような気がします。

この序曲は、前半は荘重な付点リズムを持つ重々しい曲で、十字架を背負ったキリストのゴルゴダの丘への歩みを想起させるかのようです。後半は一転軽快なフーガになります。

作詞のジェネンズは、「序曲の中には彼にふさわしからぬパッセージがいくつかあり、Messiahにはなおさらふさわしくない」と指摘していた曲ですが、どこが気に入らなかったのでしょうか。バロック時代のオペラの開始に用いられる形式に則った美しい曲で、物語は幕を開けます。

【第２曲～第７曲】～場面１救世主到来の予言～

ここではバビロンの地に奴隷として連れて行かれたイスラエルの民族が、帰還を許され、希望に満ちて祖国に戻った出来事と、救世主の到来を待ち望む希望とが重ね合わせられています。テノールの歌声<**第２曲～第３曲**>のあと、喜びあふれる合唱<**第４曲**>が始まりを告げます。

第４曲のように、神への感謝を声高らかに歌って、そのままの心がけを子孫たちに伝えて、守っていければ問題はなかったのですが、「喉もと過ぎれば熱さを忘れる」のが、人間。そのために当時、神の言葉を預かり、神に代わって人々に語る役目をしていたのが、預言者と呼ばれる人たちです。

預言者ハガイ・マラキの言葉を歌にした<**第５番～第６曲**>では、誰が神の裁きの前で耐えられるのか、そのままでは厳しい裁きがあるだけだ。と、繰り返されます。第６曲の「神は精錬の激しい火のように裁く」を受けて、<**第７曲**>では、レビの子（神殿奉仕者）たちでさえ、神の前では厳しく裁かれることが歌われています。ここで歌われるメリスマ（細かい音符の連なりを歌う音型）は、祭壇の絶えざる火の様に、全パートによって次々と絶え間なく歌われます。

※「レビ」とは、信心深かったアブラハム（我が子を燔祭の火にかけて神への捧げものにしようとしたエピソードがあります。）の子供の一人の名であり、その子孫には神殿奉仕者を勤めるものが現れたので、祭司たちをさして呼ぶ言葉になりました。

【第８曲～第12曲】～場面２受胎告知・キリストの降誕～

神の厳しい裁きの前曲とうって変わって、イエス・キリスト降誕の預言が歌われます。

<**第８曲**>で、旧約の時代から預言されてきた救世主イエスが、もうまもなく現れると、アルトのソロによって告げられます。それはまさに<**第９曲**>の歌詞のごとく、高い山からシオンの街々に声高らかに告げ知らせたい出来事でした。シオン（英語読みでザイオン）は、ユダ（ヤ）の首都エルサレム（英語読みでジェルサレム）のこと。「Arise, shine,（起きて、光を放て）」と命令された後、合唱の各パートのそれぞれの旋律が始まり、見事な和声が駆使されます。

続く<**第10曲～第11曲**>では、預言者イザヤの言葉で、暗い地表（＝人の罪）を、やがて来る光（＝キリスト）が照らし出すことが歌われます。光のさす前の暗やみが、この２曲の暗い曲調によってさらに強調されるかのようです。

救世主の登場が意味ありげに繰り返されるここまでの場面からは、救いはいつ来るのか、いかにその到来が待ち望まれていたことかが伝わってきます。

＜**第 12 曲**＞旧約の時代から待ち焦がれていた救世主が降誕しました。この歌詞も、救世主の登場を預言した旧約のイザヤ書からです。輝かしく歌われる救世主とは対照的に、これまで英雄または独裁者、権力者がどれほどこの世に輩出されたことでしょう。しかし彼らの名は、あの十字架の上に死なれたイエス・キリストの前に、何と弱々しくはかないかと思わざるをえません。詩編２：７によると、「イスラエルの王は即位の折に神の子と呼ばれる。」とあります。歌詞にある「奇跡なる、代弁者」＝政治的指導者、「偉大な神」＝戦士、「永遠の父」＝民を慮る者、「平和の君」＝繁栄をもたらす者、と解釈すると、歌詞の意味が分かりやすいかと思います。

【第 13 曲～第 17 曲】～場面３羊飼いへの降誕の知らせ～

＜**第 13 曲**＞の田園交響曲は、静かに救世主降誕をお祝いする曲なのかもしれません。キリスト誕生当時は、現代のクリスマスのようなお祭り騒ぎではもちろんありませんでした。旅人がひと時体を休める宿屋も満員で、マリアは家畜小屋で、ひっそりと飼い葉桶に生まれたばかりのイエスを布に包み寝かせていました。この曲以降、詩句は新約の中からも選びとられるようになります。

＜**第 14 曲～第 16 曲**＞は、野宿をしながら羊の番をしていた羊飼いたちのもとに、天使が現れ、救世主の降誕を知らせた場面です。当時、羊飼いたちは身分の低い者とされていましたが、神は最も重要なことを真っ先に彼らに知らせました。第 14 曲からのソプラノのソロでは、その時の様子が語られます。

続く＜**第 17 曲**＞では、天使たちが神を賛美して喜びの合唱を歌います。神は羊飼いたちの喜びのない生活に目をとめておられて、貧しくても忠実に働くけなげさを愛していたとも言われています。彼らは天上の素晴らしい音楽に心を癒され、元気づけられたことでしょう。天使の大群が去ったのち、天使の羽が舞い降り、地面にふわりと落ちる様子が、オーケストレーションによって表現され、最後まで印象的な曲です。

【第 18 曲～第 21 曲】～場面４キリストの癒し・主の栄光～

シオンとは首都エルサレムであるとは先に述べました。「シオンの娘」とは、主の民・イスラエルをさす言葉です。

＜**第 18 曲**＞は、喜びに満ちあふれ、ソプラノの歌声がふさわしい華やいだ調べです。しかし、救世主の降誕で喜びに満ちた民であるはずなのに、なぜか途中に沈んだ旋律が現れるのはどうしてなのか。やはりこれは、未来の受難を予兆する箇所なのか。「幼子イエスのエジプト逃避行」ののち、再びナザレの町に帰ってきた時の様子を、「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった」と、ルカ福音書２章 40 節以降で語られますが、第 18 曲の後半で、再び明るい曲調になっていくのは、このあたりのくだりと印象が重なります。

＜**第 19 曲**＞からはイエスが宣教を始められてからの出来事が歌われます。体の不自由な人たちがイエスに癒されていく様、これらの業（わざ）を人々に見せることで、イエス・キリスト自身が神の子であることがはっきりと示唆されていきます。アルトは通常女性パートですが、ヘンデル自身の演奏ではカウンターテノールによって上演していたという記録が残っています。

＜**第 20 曲**＞ではアルトからソプラノに、旧約から新約に、アリアも歌詞の内容も引き継がれ、イエスによる癒しが語られます。この優しさにあふれた曲調には、心を癒す、神から人への深い愛がこめられています。ここで、「彼のくびき※を受け、彼に学びなさい」というのは、「キリストは罪を背負っていない完璧な存在であり、人類の罪を代わって背負ったこと」を意味しています。

※「くびき」とは農耕用の牛馬が耕作時に首に負う　重い農機具のこと。
※「罪」とは、原罪のこと。

＜**第 21 曲**＞では、重荷はキリストが背負ってくださったことが軽快な曲調によって歌われます。この曲では、イエスが救い主として降臨したことを喜び迎える群集をイメージすると、メリスマがまた違って聞こえるかもしれません。ドゥッチオの絵画『キリストのエルサレム入城』の中では、歓迎を表して、自分の着ていた上着を脱ぎ、道に敷き詰める群集、イエスのお姿を見ようと道端の木に登る人、人々は勝利のシンボルである、しゅろの葉を手に手に持っています。群集は声高らかに、「主の御名によって来たる王に、祝福あれ、天には平和、いと高きところには栄光あれ」と神を賛美します（ルカ福音書 19 節 35 節～ 39 節）。

歌声は彼らの持つ、しゅろの葉のそよぎのようです。そして、第 21 曲のところどころ、短調なメロディーが現れる場所は、《メサイア》第２部への予兆が感じられます。時が迫ったと、祭司長たちがキリスト逮捕に近づいてくる直前（マタイ福音書 26 章 40 節～ 46 節）を思い出させる終わりの曲調です。

第２部『受難・贖罪』

【第 22 曲～第 31 曲】～場面１キリストの受難～

ここから受難の場面となります。《メサイア》では、新約に多数記されている生前の奇跡よりも、その後に直面した受難の方に比重が置かれています。イエスが捕縛され罪人として処刑されるまでのたった一晩の出来事は、そこに居合わせた弟子たちの信仰への思いが強く心に刻まれることとなった体験であったとともに、その出来事を通して、人の罪と、それを背負って死んでいったイエスの赦し、深い愛を感じることができます。そして、旧約の預言が成就した、ということも意味しており、キリスト教にとって非常に大事な場面です。

＜**第 22 曲**＞十字架に架けられたイエスを、聖母マリアや弟子たちが遠く離れたところからどうすることも出来ずに見上げ、悲しんでいる様子が思い浮かばれます。

＜**第 23 曲**＞では、捕縛されたイエスの情景がソロで歌われます。最後の晩餐で、イエスはパンとぶどう酒を分けながら、弟子の裏切りを「悪魔にささやかれ、師を銀貨 30 枚で売る」と例えました。弟子たちの裏切りが

ここから始まります。ゲッセマネの園での祈りの時、イエスを捕まえようと刀などの武器を携えてやってきた役人たちを恐れ、その場から逃げ出してしまった弟子たち。弟子の一人ペテロは、大祭司・カヤパのところへ連行されたイエスの身を案じ、こっそり中庭まで様子を見に来たものの、その場にいた野次馬から、「あんたは、あのイエスと一緒にいた人か」と問われ、「あんな人の事なんか、何も知らない」と3度も否定しました。これらの劇的な場面での深い悲しみが、アルトの深い響きをもって歌われます。

<第24曲>の哀調と激しさにあふれた調べは、グレコの絵画『聖衣剥奪』に描かれた、聖母マリアやマグダラのマリアの涙も出ないほど打ちひしがれた面持ちや、卑しげに衣の裾を引っぱる男など、イエスを取り巻く人々の表情を思い出させます。

前曲とうって変った静かな**<第25曲>**。ムチ打ちのリズムの組み合わせに、さらに速度も特徴的な指示がされ、鋭く悲しく、同時に「healed（癒された）」響きを帯びています。ムチ打たれた傷からしたたるキリストの血と汗によって、人々の罪は許され癒されることを「信仰宣言」しているように聞こえます。

※この曲の出だしは、後年、モーツァルトの《レクイエム》のキリエや、バッハの《平均律クラヴィーア》の曲にも使用されました。

<第26曲>イエスの受難を見捨てて、散り散りに逃げた弟子たちの心境は、まさに「さまよえる羊」です。

十字架につけられた時にイエスが発した「**父よ、彼らをお許しください。彼らは何をしているのか、分からずにいるのです**」（ルカ福音書23章34節）という言葉が、弟子たちの心にはどのように響いたことでしょう。最後のコラールは、彼らの深い悔恨が感じられるような調べです。弟子たちに裏切られ見捨てられたイエスは、ゴルゴダの丘で十字架にかけられますが、群集はかなりあざとい言葉で、「自分が神なら自分を救ってみろ！」と罵りました。**<第27曲>**ソロと**<第28曲>**合唱で、その場面が歌われます。ヘンデルは、第28曲ではじめてバスをフーガのスターターに起用しました。すごみのある男声から女声に移行していくことで、臨場感が増していきます。

イエスの最後の言葉、「我が神よ、どうして私をお見捨てになったのですか」は、**<第29曲〜第30曲>**ソロで歌われます。このあたりは、《マタイ受難曲》や《ヨハネ受難曲》、《スタバトマーテル》で同様の意味の歌詞を聴かれる時にも、ヒントになるかもしれません。

<第31曲>では、「彼は生命の地から追放された」と、イエスの死を意味する言葉が歌われます。ピエタ（悲しみの聖母子像）や、墓に葬られるイエスの絵など、この場面をイメージできる彫刻や絵がミケランジェロなどによって多数残されています。

【第32曲〜第35曲】～場面2キリストの復活と昇天～

<第32曲>のアリアでは、イエス・キリストの復活への希望が歌われます。

<第33曲>では、ここまでテノールによって歌われてきた敬虔な曲調が一転して明るくなり、キリストが天に昇っていく場面が歌われます。ここは、マルコ福音書16章19節、ルカ福音書24章50節、使徒行伝1章1〜11節に詳しく書かれています。キリスト昇天の場面の絵はたくさん描かれています。どれも天国の門の脇に、たくさんの天使がいて、祝福の歌を歌ったり、楽器を奏でていたりと、とても明るい歌が聞こえてくるようです。

この詩編は、元来、礼拝者が神殿に入る儀式の中で歌われたとされています。華やかな曲は、ヘンデルの代表曲でもある《水上の音楽》や《王宮の花火の音楽》と似ていますが、二組のオーケストラを使って祭典的な気分を出しています。

第33曲を受けて、**<第34曲〜第35曲>**では、豊かさがあふれんばかりの天上の情景が歌われます。

【第36曲〜第39曲】～場面3福音の拡がり～

イエスは天に帰られる前に、「聖霊があなたがたにくだる時、あなた方は力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となるであろう」と弟子たちに言われました。この文章から、**<第36曲>**の意味が分かりやすくなると思います。

そして、聖霊がくだって力を得た弟子たちが、世界に福音を述べ伝えるために出て行く様が、**<第37曲>**で力強く歌われます。さざ波のようにわき立つ合唱は、世に福音が広まる様子であり、弟子たちが群れをなして出てゆく喜びに満ちた足音のようでもあります。

新約の「使徒行伝」には、このイエス復活後に世界に伝導の旅へと出て行く弟子たちの姿が書かれています。受難の時には、我さきにと逃げ出していった弟子たちが、なぜ人が変わったように、迫害を恐れることなく強くなったのか、そう考える時、イエスの死後に起こった復活こそが、キリスト教をキリスト教たらしめる出来事になったと言えるでしょう。

この曲では詩編68:11をジェネンズは使用していますが、次にくるソプラノのアリアにpreachに則って作詞したと考えられ、文章としては、The company of the preachers was greatに並べ替えるとより分かりやすくなるでしょう。

哀調を帯びた調べの**<第38曲>**。伝道に行った弟子たちは、行く先々で迫害を受け、また、当時の道路事情での過酷な旅で足も傷つきました。その傷ついた足を歌詞では「美しい足」と表し、優しく歌いかけます。受難前のイエスの「罪の女に香油と涙で洗われ、髪の毛で拭われた足」の情景をも連想させ、ソプラノの響きに癒される曲です。

第37曲の合唱で、聖霊が降りてきて力に満たされた様が歌われ、**<第39曲>**の合唱では、聖霊に満たされた弟子たちが世界に教えを伝えに旅立つ情景が歌われます。石打ちで殺され、イエスの死後最初の殉教者となったステパノや、最初は迫害する側であったのが、天より啓示を受けて一転し、福音を伝える旅に出て、今度は迫害される側となったパウロなどにより、教えは広まり続けました。

【第40曲〜第44曲】
～場面4愚かな人間たちの反抗と神の圧倒的勝利～

＜**第 40 曲～第 41 曲**＞では、神の教えを伝えても、逆らい、弟子たちに迫害を加える、王たちの様子が描かれています。第 41 曲は、バスのソロによる震えあがるような迫力のある曲です。合唱も負けじと鋭く激しい内容を歌で表します。この曲の歌詞は、旧約聖書に書かれています。

＜**第 42 曲～第 43 曲**＞では、迫害したり、逆らった王たちは最後の審判で裁かれる様子（器物のように砕かれる様）が歌われます。詩編 2 編の中に、第 40 曲～ 43 曲の歌詞がそのまま出てきます。

第 39 曲で述べましたが、キリスト教が全世界に広がっていく中で、過酷な迫害を受け、殉教する弟子たちが現れます。ペテロは迫害を受けても、キリスト教の教えが広まっていったことを確信して、「この都は主の都になる」と心穏やかに死に向かいました。彼らが処刑前に垣間見たであろう天国の様子が、有名な＜**第 44 曲**＞ハレルヤコーラスに集約されているのかもしれません。ハレルヤコーラスの歌詞は、「ヨハネ黙示録」に登場しますが、この天国の様子が書かれる前に、かなり恐ろしい最後の審判の様子が、第 4 章まで書かれています。ジェネンズはこの中から見事に詩句を選びとりました。

※「ハレルヤ」とはヘブライ語で神を讃美せよ」の意味

第 3 部『復活・永遠の生命』

第 3 部は、最後の審判と永遠の命をテーマとした曲になっていきます。

【第 45 曲～第 46 曲】~ 場面 1 永遠の生命の約束 ~

＜**第 45 曲**＞は、旧約・ヨブ記の主人公となっているヨブの言葉をもとに、復活への信仰をゆったりとしたソプラノのアリアで歌います。ヨブは彼の信仰心を揺るがせかねないほどの幾多の困難に出会いましたが、生涯、神への信仰を守り続けた人です。後半は、新約・コリント人への第一の手紙 15 章 20 節の言葉を用い、キリストの復活を信じることが歌われます。

＜**第 46 曲**＞では、死と生、静と動の対比が見事に描かれます。歌詞に書かれているアダムとは、神によって最初に創造された人間です。「創世記」にてアダムは、神とのたった一つの約束を破り、妻イブとともに楽園を追放されてしまいます。ここから人は、一生苦しんで地から食物をとること・最後には土にかえること（死）が課せられたのです。楽園にいることができたら、苦しんで地から食物をとることも土にかえる（死ぬ）こともなかったのでしょう。

初めに書いた通り、聖書には人々の営みの愚かさが繰り返し書かれていますが、人間の歴史の始まりで記される、誘惑に負けない、という選択ができたのにそれをしなかった心の弱さ、それを人の持つ罪（原罪）と定義することができるでしょう。死が免れないものであるように、人は罪から逃れることができず苦しみます。しかし、イエスの受難により人々の罪は赦されました（《メサイア》第 2 部）。続く最後の審判では、イエスを信じる者の死の克服が歌われます。

【第 47 曲～第 52 曲】~ 場面 2 最後の審判・死者の復活 ~

第 47 曲～第 51 曲では、引き続きコリント人への第一の手紙 15 章 50 節以降の言葉を使って、最後の審判の様子が歌われます。＜**第 47 曲～第 48 曲**＞は、バスのソロによって深く豊かに歌われ、その調べに導かれるように最後の審判のラッパが高らかに響き渡ります。すると今までに死んだ人たちもすべてよみがえり、生前の行いにより、永遠の命を頂く復活か、永遠の暗闇の中か、炎に燃やされるか、裁きを受けます。

様々な「Requiem」の曲中の「Tuba mirum（奇しきラッパの響き）」、或いはブラームスの《ドイツレクエイム》第 6 曲でも、ほぼ同じ言葉を歌詞として使っていますが、それらの物々しさとは対照的に、《メサイア》では明るい感じの最後の審判のラッパの響きで死者は復活し、＜**第 49 曲～第 50 曲**＞のアルトとテノールによって、「死は勝利に飲み込まれた」と予言の実現を語ります。

＜**第 51 曲**＞は神への感謝の歌です。合唱により次々と発せられる thanks の言葉が、天使たちの羽音、あるいは第 21 曲でも触れた、勝利のシンボルであるしゅろの葉ずれの音のようにも聞こえる輝かしい曲です。

第 49 曲～第 51 曲までを受けて、＜**第 52 曲**＞では、「もしも神が私たちの味方なら、誰も私たちに敵対できない」と、力強く勝利を宣言します。

【第 53 曲】~ 場面 3 信じる者の永遠の命 ~

《メサイア》の終曲である＜**第 53 曲**＞は、勝利と復活の集大成です。the Lamb of God は神の子羊。子羊はキリストのことです。第 2 部の終曲のハレルヤと同様、ここでも「ヨハネの黙示録」から引用されています。引用元の聖句は、高らかな賛美の内容にふさわしい内容で、バッハも《カンタータ 21 番》でこの箇所を使用しています。

最後に。賛辞に続く雄大なアーメンコーラスについて。「アーメン」とは「まことに」、「本当に」、という意味のヘブライ語 amen に由来し、「まことにかくあれかし」という大きな肯定を意味します。

物語は、かくして壮大なフーガによってイエス・キリストを賛美し、幕を閉じます。

作成：TIVE 資料チーム
主要参考文献：
・旧約聖書 / 新約聖書
・「ヘンデル」：三澤寿喜
・「旧約聖書入門」「新約聖書入門」：三浦綾子
・メサイアってどんな音楽？：大間宏
・「ヘンデル＜メサイア＞必携」：熊木晟二
・団員資料＜持田作成：聖句解説＞

本日は秋の貴重な午後、足をお運び下さり、まことに有り難うございました。

来週から、私達は次回の「マタイ受難曲」の練習が始まります。TIVE で初めて取り組む曲です。またみなさまをお迎えできる日を心待ちにしながら、気持ちを新たに、一層精進を重ねてまいりたいと思います。

どうぞお元気でお過ごしくださいますよう。